第 11 回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成 29 年 7 月 14 日（金）
15 時 00 分 ～ 16 時 55 分
文部科学省 15Ｆ特別会議室

〔出席者〕
（委員）沖森主査，森山副主査，秋山，石黒，入部，川瀬，塩田，鈴木，関根，
滝浦，田中，やすみ，山田，山元各委員（計 14 名）
（文部科学省・文化庁）西田国語課長，鈴木国語調査官，武田国語調査官，
小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕
1　第 10 回国語分科会国語課題小委員会・議事録（案）
2　成果物の構成について（素案）Ver.1.1
3　Ｑ＆Ａの例（案）Ver.1.1
〔参考資料〕
1　「国語に関する世論調査」におけるいわゆる「コミュニケーション」に関する問い（抜粋）
2　国語に関する世論調査　分類別問い一覧（机上配布資料，委員のみ）
3　国語課題小委員会における審議スケジュール（案）
〔机上配布資料〕
○　国語関係答申・建議集
○　国語関係告示・訓令集
○　国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）

〔経過概要〕
1　事務局から配布資料の確認が行われた。
2　前回の議事録（案）が確認された。
3　配布資料２「成果物の構成について（素案）Ver.1.1」の１～２ページについて説明があり，説明に対する質疑応答と意見交換が行われた。
4　配布資料２「成果物の構成について（素案）Ver.1.1」の３～４ページについて説明があり，説明に対する質疑応答と意見交換が行われた。
5　配布資料２「成果物の構成について（素案）Ver.1.1」の５～６ページ及び配布資料３「Ｑ＆Ａの例（案）Ver.1.1」について説明があり，説明に対する質疑応答と意見交換が行われた。
6　参考資料１及び２について説明があり，質疑応答が行われた。
7　次回の国語課題小委員会について，平成 29 年 9 月 21 日（木）午前 10 時から 12 時まで旧文部省庁舎２階・文部科学省第２会議室で開催することが確認された。
8　質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査
では，コミュニケーションの在り方及び言葉遣いについての協議に入ります。前回，報告にＱ＆Ａを盛り込むこと，また，その問いについて是非御提案を頂きたいということをお願いしました。主査打合せ会では，問いの案として 200 問程度を集めたいと

話題になっておりましたが，実際には，250 近くの御提案を頂いたとのことです。御協力いただきましてありがとうございました。

当初，本日の会議では，委員の皆様方が御提案くださった問いの案を御覧いただいて，その内容について検討していただくということも考えておりました。しかしながら，問いの数が非常に多いということ，また，内容が多岐にわたっていたり，重複していたりするということもありますので，一旦，事務局でよく整理をした上で，今後，どのように扱うことにするかを検討したいと考えております。

そこで，本日は，まず，配布資料２「成果物の構成について（素案）」を御覧いただきたいと思います。これは前回の国語課題小委員会で委員の皆様方から頂いた御意見を踏まえて整理し直したものです。本日の国語課題小委員会の後は，しばらく会議はお休みに入ります。しかし，この間に主査打合せ会を中心に，内容を具体的なものにして，次回の国語課題小委員会では，ある程度まとまったものを御覧いただきたいと考えております。つきましては，本日，できるだけ多くの御意見を頂いて，次回にそれを反映するようにしていきたいと考えております。

それでは，まず事務局から，配布資料２，全体の概要と，２ページまでについての説明をお願いいたします。

○武田国語調査官

配布資料２は，前回，この国語課題小委員会の場で御議論いただいたものをもう少し整理したものになります。その後に，一度，主査打合せ会がありました。その中でも確認していただきました。そこで十分にこの案を御検討いただく時間はありませんでしたので，事務局でまとめて，主査打合せ会の委員を中心に，それぞれメールや電話などでやり取りをして御指導いただきながら作ったものです。

特に大きな変更点は，一番頭のところに四角で囲んだ部分がありますが，ここにこの報告で最も言いたいこと，趣旨が来たということが一つです。

それからもう一つ，３ページに，言語コミュニケーションにおける四つの観点という図がありますが，これを整理し直して，案としてラベルを貼っております。

それから，Ｑ＆Ａに関しては，当初の形から，この３ページに挙げた表のラベルに沿って整理し，そのラベルに合わせた書きぶりに変えたということです。

では，１ページ，２ページについて説明いたします。

１ページですが，最も大事なところを頭のところで掲げるということがありました。「はじめに」という部分がありますが，これまで通例，国語施策で出しているものは，「はじめに」には，これまでの経緯のようなものが入っております。ここにどんと掲げるという考え方もあると思いますが，今日の段階では，「はじめに」には施策の経緯をということで考えています。

１章の頭，前書きといったような部分にここにあるような趣旨のことを書いてはどうかというのが，この四角の内容です。読みます。

> 私たちは，一人一人が異なる存在である。とりわけ現代は，価値観が多様化し，共通の基盤が見付けにくくなっている時代である。こうした「多様な私たち」を前提とした社会で生きていくためには，言葉を使った伝え合い（言語コミュニケーション）によって，情報と気持ちを共有し，互いの合意点を見いだしていくことが欠かせない。
>
> 言語環境が大きく変化する中で，何をどのように伝え合うことが望ましいのか，これは，複雑化した今日を生きる私たちの多くが抱える悩みである。
>
> 文化審議会国語分科会は，的確な言語コミュニケーションの条件を，言葉における「正確さ」，「分かりやすさ」，「受け入れやすさ」，「丁度良い距離」の四つの要素が，それぞれを生かしつつ，他と支え合う状態であると考える。

これらの観点をヒントとして提示し，言葉による伝え合いのために，どのような在り方が求められるのか，共に考えるきっかけとしたい。

前回とどこが違うかと言いますと，一つは，４行目です。前回は，「言葉を使った伝え合いが欠かせない」ということでしたが，その伝え合いが何を目的として行われるのかを入れた方が良いのではないかと考えました。それで，情報と気持ちを共有するということ，そして，互いの合意点を見出していくということを入れております。特にこの辺りについては，この後，是非御議論いただければと思っております。

それから，この三つ目の段落になりますが，四つの観点がここに挙げられております。これは３ページに表がありますので，直接の議論は３ページで後ほどじっくりとお話し合いいただきたいと思っております。今まで，「正確さ」，「分かりやすさ」，それから「配慮」というのか，あるいはその「配慮」というのを「ふさわしさ」と「相手に対する気遣い」みたいなものに分けるのか，そのような議論もありましたが，今回，少し思い切って整理をして，「受け入れやすさ」，「丁度良い距離」として，全部で四つの要素にして掲げています。

それから，ここも是非御議論いただきたいと思っていますが，これまで伝え合いにおいては絶対的な正解はないということがずっと話題になってきています。その中で最も望ましい形を探していく。一方で，的確なコミュニケーションというのは，三つの要素あるいは四つの要素が丁度よくバランスが取れている状態を的確なコミュニケーションと言うんだと，ここでは「的確」という言葉を使っておりますが，例えば，「的確」ではなくて「より望ましい」とか「望ましい」というような言葉に抑えるのか，それともはっきりと「的確」という言葉を使っていくのか，そんなことも御議論いただければと思っています。

２ページを御覧ください。まず「１．なぜ今，伝え合うことについて検討するのか」，この部分は，この報告をどうして今このタイミングで示すのかということに関する根拠となる部分になるかと思います。この内容については，これまでお話し合いいただいたこと，前回の配布資料とそれほど変わっておりません。

ただ，４番目に，「その他」と言いますか，「様々な課題」とすべきかもしれませんが，直接この指針のきっかけになっているのは（１），（２），（３）の辺りですが，それ以外にもコミュニケーションに関して，現代的な今日の問題があるであろうということです。そういったものについてもちゃんと見ていますよということを（４）のところで示すのはどうだろうかということで挙げた部分になります。

例えば，ここは，主査打合せ会の方でもそれほどお話をきちんとしていただいているわけではないので，ここで是非，（１），（２），（３）以外にどんな課題があるのかをお話しいただきたいと思います。例えば，「察し」の文化のようなものが日本にはあるということがよく言われますが，それと言葉による伝え合いとの関係。「敬語」に関して，特に「国語に関する世論調査」で，ここ 20 年ぐらいでしょうか，敬語に対する意識が非常に高まっている。良い面もあるでしょうし，副作用のようなものもあるかもしれない。あるいは，これも「国語に関する世論調査」でよく分かるんですけれども，世代間のコミュニケーション観の相違。若者の方がどちらかというと周囲に合わせようとしている。そして，高齢の方の方が一貫した自分であろうとするといった傾向があります。四つ目については，ここでもよく話題になりましたが，言葉についての寛容でない態度などを挙げられるかもしれないということで，ここに並べてあります。

次に，「２」ですが，ここは前回までもう少し詳しいものを掲げていたところです。前回の議論の中でこの部分が解説になっているということ，それから，ちょっと学術的に過ぎる，あるいは，一定の分野の考え方に偏ってしまうおそれがあるのではないかといった御意見がありました。今回そこは少し簡単にして，もう一度しっかりと考え直すべきところかと思い，簡単な書き方にしています。この部分について，例えば，

主査打合せ会の中では，このモデルの示し方などについても，単に談話分析のように会話を並べるのではなくて，漫画やイラストといったものを使うという方法もあるのではないかと話題になっています。ただ，皆さんが御心配になっているのは，言葉の問題としてちゃんと扱えるかどうかということだと思いますので，言葉の問題としてどうやって示すかということについて，もう一度御議論いただけたらと思っております。

○沖森主査

まずは，ただ今の事務局の説明について，直接関係する御質問はございますでしょうか。よろしいでしょうか。　（ → 挙手なし。）

では，協議に移りたいと思います。この成果物の構成についての素案を，１ページ，２ページ，３ページ，４ページと，それぞれ区切って御協議いただきたいと思います。

そこでまず，１ページについて御意見を頂きたいといます。この四角で囲んだところは，前回の会議で，冒頭に示すべきではないかという御意見があったところです。そこで，四つの要素については，改めて３ページのところで四つの観点について御意見を頂きたいと思いますので，それ以外のところで御意見があれば頂きたいと思います。前は，一文でということでしたが，何文かで端的に示すという形でまとめてみた素案でありますが，いかがでしょうか。　（ → 挙手なし。）

それでは，また後で御意見を頂きたいと思いますが，取りあえず事務局の方から何かここがという点があればと思います。

○武田国語調査官

恐らく３ページの四つの観点のところをお話し合いいただくと，またこちらに戻ってくるところもあるかと思いますので，また３ページの後にでも，もう一度戻っていただければと思います。

○沖森主査

それでは，続きまして，２ページの「１．なぜ今，伝え合うことについて検討するのか」及び「２．言語による伝え合いは，どのように行われているか」，この部分についての御意見を頂きたいと思います。特に，今回の報告は，この１の部分で，その報告の意義が示されることになります。したがって，ここに挙がっていること及びそれ以外にまだ必要なことがあれば，御意見いただきたいと思います。

○塩田委員

ものすごく骨組みがしっかりしているので，細かい話に入っていきますと，２ページの冒頭の「なぜ今，伝え合うことについて検討するのか」というのは，「検討するのか」より「考えるのか」ぐらいでもいいかと思います。意味が変わらないのであれば，漢語は避けていった方がいいという気がしました。そうなってくると，「基本的な認識」も「基本的な考え」でもいいかなという気もしてまいります。

○関根委員

「なぜ今」というところで，それに対する答えみたいな感じで（１），（２），（３），（４）と来ていると思うんですが，（１）と（３）は，「なぜ今」というところに直接，それを受ける感じになっています。（２）だけが，今ということへの回答でなく，大前提みたいなことを言っています。

それで，（２）のところの，例えば，「異なった存在であり，異なりを踏まえて歩み寄ろうとし，情報や気持ちを共有する」というのは，例えば，（４）の「察し」の文化とか，「敬語」に対して意識が高まっているとか，「（４）そのほか」の幾つかと関連

しているかと思います。だから，その辺りで，どうも「そのほか」とまとめるのがもったいないというか，大事な観点だと思うので，（２）に関連してまとめられないかと改めて思いました。

○川瀬委員

多分，「なぜ今」というところがポイントなのかと思います。30 年，40 年昔の家族がみんなで会話をしてという時代ではなく，個別ばらばらな人間になっている，人間関係が希薄になって，それぞれが自分の好きなことに対してだけ詳しくなる。そんな今だから（２）に「他者と自分との異なり」という項目が立ったのかと読みました。とすると，それこそ（２）の言葉の付け方なのか，他者と自分との異なりは遠い昔からあったので，「なぜ今」というところを主にしたいのであれば，ここの言葉を工夫することも一つの観点かと思います。

もちろん，関根委員がおっしゃったように，（１）の次に（３）があって，そもそも（２）と（３）が多様性の広がりという意味では重なっているかと思います。（１），（３），それに，「（４）そのほか」－こういう大くくりではなく，もう少し小項目にするのもあるかと思いました。

○関根委員

補足させてください。最後にある「言葉に対する不寛容」というのが大事なのではないかという議論があったと思います。それはこの（２）の異なりというところとつながっていく問題ではないのかと思うので，（２）と結び付けて，もうちょっとメインに出して，順番はともかくとして，（２）をまとめ直すという手もあるかと思います。「言葉に対する不寛容」の問題が最後に来てしまっているので。

○入部委員

「なぜ今」について違った観点から。このテーマでこのような報告書を出すのは，次は恐らく 20 年後とか，かなり先になると思います。それを考えると，戦略的には，「なぜ今」という言葉を付けない方が長く読まれるものになるという気がします。

また，「伝え合うことについて」というのも，「言葉を使って伝え合うことについて」と多少限定的にした方が，内容からするといいと思います。

○田中委員

１ページのこの四角のところがスタートになっていますが，この中で言っていることと，２ページの「なぜ今」かのところと，それぞれがどうつながっているのかが多少分かりにくいと思います。

この四角の中は，全部，今起こっていることの問題の原因について言及しています。ここに出てくる順番に，多様化する私たちによってどんな問題が起こっているのか，共有されにくくなってきている情報や気持ち，そして，大きく変わった，あるいは変わりつつある言語環境，そこでどんな問題が起こっているから何か考えなければいけないといったように落としていき，四つの観点が問題を解決するのに有効であると出していった方が良いと思います。そうすることで，前から後ろまで，一貫性があり，そうした問題を解決するために，情報は正確に，伝え合う言葉は分かりやすく，相互に受け入れやすいように適度な距離感で，といったことに結び付けられ，言うことは同じでも，つながりを意識して柱を立てた方が良いと思いました。

前々からいろいろな委員の方から出ていたように，何かチャプターごとにぶった切られていて，その関係性がよく分からない，浮いて見えるという話がありましたが，つながりを意識して，事務局でこの四角の中を大分練ったと思うのです。それを生かし

た形で（１）へとか（２）へとか流していった方が，同じことを言うにしても伝わりやすいと思いました。

ついでながら，２ページの１（４）のところ，様々な課題というのは，これまでに行ってきた「国語に関する世論調査」を有効活用したいということだと思います。これは時々における国語課が考える現代の日本語社会における問題みたいなことだから，もしかしたら頭のところで，20 年間蓄積のある「国語に関する世論調査」では，こんな観点から実施し，例えば世代差とか，属性差とか，問題などが読み取れるといったところから流し込んでいってもいいのかもしれません。

ただ，そこの中で，これは「国語に関する世論調査」だからというのがあるんですが，障害と言葉におけるコミュニケーションに関連するようなところは，この「国語に関する世論調査」では取り扱っていないし，今回の私たちのメンバーにも詳しいメンバーはいないので，そこのところでその問題を取り上げるのがいいのか，取り上げてもうまく解決できないかもしれないし，といって，取り上げないと，そのことについて全然考えていないのが見えるといったところは，少し悩ましいと思っています。

○川瀬委員

「伝え合う」，「伝え合い」という言葉が多く使われていて，確かにこれはうまい言い換えだと思う一方で，今までの話の中で，受け止める側が理解しようとしているかという要因も一つ出ていました。その辺を，１（２）「他者と自分との異なり」，又は「不寛容」という部分で，受け止める側からも理解しようとしているのか，歩み寄ろうとしているのかということを，どこかに出した方が良いと思います。出しておかないと，発信する場合の注意ばかりが羅列されていくような気がします。

受け止める側には，「不寛容」だけでなく，「無関心」という問題もあります。それだけに，投げるときだけではなく，受け止めるときも，みんな近づこうよというか，取り組もうよというようなことが，どこかに欲しいと思います。恐らくこの辺が大きな骨組みの章立てになってくるんですよね。だとすると，投げる側にも注意が必要だけれども，受け止める側にも，積極性，努力が必要なのではないのかということは入れてもいいのかと思います。

○山元委員

２ページの，検討している部分に関してですが，川瀬委員がもう一つ前の御発言でおっしゃったような多様性の広がり，（３）の中に他者と自分との異なりも入るのではということも，なるほどと思いました。

それで，この柱立てのポイントを要領よく，重なりをうまく解消するように変えるとしたら，「多様性」という言葉がキーワードになると思いました。それで，三つ，多様な文化とか，多様な他者，いろいろな外国人の人とお話ししなければいけないという，そういった意味での多様性がある。もう一つが，多様な世代，世代間の問題。三つ目が多様な媒体。これはメールとかＳＮＳとか，媒体自身が変わってきつつあるので，そういう三つの多様性のように書くと，もう少しくくりが良くなるかと思いました。

そうすると「察し」，これは文化の違いの問題というので，そのほかの課題の１番目は，多様な文化差，文化を背景に持っている多様な他者との問題点というので，「・」の一つ目は，そちらに解消できるし，「敬語」に関しては，世代というのでしょうか，「・」の三つ目もそちらの方に吸収できるのではないかと思った次第です。

さらに加えて，田中委員がおっしゃったように，「国語に関する世論調査」で浮き彫りになったデータを織り込みながら説明していくと，より説得力のあるものになるかと思いました。

○滝浦委員

先ほど，川瀬委員がおっしゃったことを伺って，ハッとしたのですが，この全体の案は，とても今風の感じがして，しっかりしていて，いいなと思いましたが，確かに言われてみると，「伝え合い」という言葉が，みんなが伝えようとだけしていると見えてしまいます。それに対する分かる方の言葉はあるかなというと，「分かり合う」という言い方はあっても，「分かり合い」という言い方は余りしないかもしれない。何かそういう言葉を考えたとすると，「伝え合いと分かり合いのためのコミュニケーション」という言い方をして初めて両方の立場が入るという気もします。

そういう意味で，「なぜ今」というのを入れないで，もっと長いスパンでというのはそのとおりだと思います。ただ，現代的なコミュニケーションを考えたときに，本当に人の言うことを分かろうとしているかというところの問題が結構あるような気もします。これを壊そうということではないのですが，もし伝え合うのと一緒に分かり合うのもペアだという感じで取り込んでいけるのであれば，両方の立場において尊重するのがいいんじゃないですかというのは，とてもいいような気がしました。

○やすみ委員

私も今の話の流れを受けての感想なんですが，まず，この１ページ，２ページ，３ページを拝見しても，随分とすっきりとしたまとめ方になってきて，それはとても良いことだは感じてます。確かにお話上手は聞き上手という言葉があるように，相手のちょっとした一言で，すごく傷ついてしまったり，でも，本当は傷つかなくてよかった一言かもしれなかったりして，その感覚はやっぱり人それぞれだと思います。

その辺りを，コミュニケーションということなので，話す側と受け取る側，お互いに感じ合うということが大事だといった，そういうメッセージもあるとよりコミュニケーションを取るときの，最近みんなが感じている恐ろしさとか，ちょっと何か発言するにも怖いと思ってしまうようなこともなくなるかもしれません。あとは，誰もが一度や二度きっと経験したことがある，ちょっとした一言で相手とのその後の人間関係がガラッと変わってしまった，というような出来事が少しでも解消されるような提案というか，そういうことができるといいかと感じました。

○山元委員

今の「伝え合う」の文言についてですが，伝えるばかりという，比重がそちらにあると受け取られるとしたら，やはり問題だとは思います。教育の世界だと，「伝え合い」はポピュラーな言葉なので，どこか一言，「伝え合う」というのは「合う」の方，受け止めて伝えるという概念なんだという説明がどこかにあれば，受け止める方，そちらもおろそかにしていないということになっていいかと思いました。

○森山副主査

２（１）の一番下の行ですが，「他者と自分との違いについて洞察を働かせる」という部ですが，違いについてだけではなく，洞察を働かせるというのは，コミュニケーションの全てにおいて大切なところだと思います。例えば「伝え合いの状況を把握しつつ，お互いに洞察を働かせる」という言い方の方がいいかと思います。

○川瀬委員

２（１）の一つ目の「・」が，双方向性ということで，受け止める側の話が入っているんだろうと思います。モデルで（１）を立てるよりは，双方向性をタイトルにして，それを理解するためにモデルを出すといった方が分かりやすいとも思います。

ここは，医者と患者の話のところですよね。いきなりモデルとして幾つかポンポン

出すよりも，こういうパターンがありますという意味で，双方向性のことをまず出して，実例としてモデルを出した方がいいのかという気もします。

ずっと拝見していて，先日のＱ＆Ａにしても，この文章は，どのレベルの人に向かって書く，発信するのかという気がします。指導者の指導者ぐらいだとしたら，文言が多少堅くても，順番も多少並びが悪くても，とにかくエッセンスをガンガン放り込んでいけばいいと思います。でも，そういう専門的なものを読み慣れていない人にも読んでもらおうというのであれば，どんどん平易になる分，どんどん内容は薄くなっていくような気もします。うっかりすると，前段だけで莫（ばく）大な量になってしまうのではないかという気もします。

○森山副主査

先ほどの「分かり合う」という議論はとても大切だと思うのですが，今，山元委員がおっしゃったみたいに，「伝え合う」という中で分かるということも一般には入るかと思います。それから，「分かり合う」は，違う意味でお互いの事情のようなものを相互に配慮するみたいな意味も少しあります。「分かり合う」という言葉を２（１）の「伝え合いの双方向性」の辺りに位置付けるという方が分かりやすいような気がします。とても大切だと思いますので，確かに「分かる」というのはどこかに入れるといいと思います。

○鈴木委員

今，森山委員がおっしゃったことは，もちろん私も賛成ですが，私ももう少し強く出していった方がいいような気がします。

というのは，前にも申し上げたのですが，いろいろな場面でコミュニケーションしたいと思っていない人たちが，この審議内容のきっかけ，幾つかあるきっかけの中の一つにあったような気がします。そういうコミュニケーションしたくないという人の割合が増えている。これは特に世代間でそういうようなことを感じてしまう若い世代の人たちがいるということが多分あったと思います。それからすると，やはり，まず分かる方ももう少し，あなた方も対象になるんだというような，そういうメッセージはきちんと，この頭の段階で入れておいた方がいいと思います。

双方向性はもちろん概念として入っているというのはよく理解できますが，はっきり「分かり合う」ということもどこか言葉として一つ入れておいた方がいいと思います。

○川瀬委員

分かろうとするというお話から，分かり合うということになってきました。「分かり合う」でも，「分かろうとする」でもいいんですが，コミュニケーションをしようという意識を持とうという話まで入ってしまうとちょっと大変なことになってくると思います。コミュニケーションを取ることが大事なんだということは必要ですが，そういうことに興味のない人は，元々この報告は手に取らないだろうからいいのではないか，そうした人まで心配しなくてもいいのではないかという気もします。

○鈴木委員

私もそう思うんですが，ただ，やはりどこかに入れておいた方が，少しそこは踏み込んでもいいんじゃないかという気がします。

○川瀬委員

善意の熱意のある人は，話せば分かると思って一所懸命話すけれども，相手は迷惑でしようがないというような場面がすごく増えていると思うのですが，確かに盛り込んだ方がいいのかもしれません。

○塩田委員

本音のところを言うと，幾ら話しても通じない人には，適当な距離を取っておくのが一番いいと思います。ただ，それを言っても始まらないので，議論に出ている「分かり合い」という方を中心にしていった方がいいかと思います。

理由は，伝えるというのは，当然，動作の完了を含意していないですよね。伝えたけれども伝わらなかったということがあるように，動作の完了は含意していないわけです。だけど，分かるというのは，当然，含意しているわけですから，必要なのは，相手を分かろうと努力すること，あとは，分かってもらおうと努力すること，これらのことは出したいと思っています。両方を合わせて何か名詞ができないかなと思ってずっと考えていますが…，「分からせ合い」－，ちょっと変だな。

○川瀬委員

結局，コミュニケーションということに戻ってきてしまうんです。

○塩田委員

分かってもらおうと努力することと，分かろうと努力することの二つを出していきたいところです。

○関根委員

「分かり合い」のことは，１（２）のお互いの情報や気持ちを共有するとか，知って満たそうとする努力とか，この辺りに関係してくるのではないかと思います。ですから，（２）のところに，「分かり合い」の大切さみたいなものが盛り込めるのではないかと思います。

○石黒委員

多様性が広がっている中で，伝え合うことが成立するかどうかを考える場合に，やはり共通の基盤をいかに作るかということが重要だと思います。私は，「伝え合い」をベースにしていいと思っていますが，「分かり合い」というのも非常に重要だと思います。別の言葉で言うと，「歩み寄り」でしょうか。話す側も聞く側も共通の基盤に乗ってこられるように歩み寄るということが重要だと思います。ただ，「歩み寄り」という表現を前面に出してしまうと，すごく分かりにくくなってしまうので，１なのか２なのか分かりませんが，下位項目の中で，「歩み寄り，伝え合い，分かり合い」みたいなことがあるといいかと思いました。

○山元委員

今の点に関してですが，「分かり合い」と，今おっしゃっていることは，結局，コミュニケーションの価値のことでしょう。やはりコミュニケーションは大事な意味のあることで，そんなの関係ないということではないものなんだという価値について言っている。にもかかわらず，今日的にいろいろな多様さがあって伝え合いにくくなってしまう。まず伝え合いの価値を書き，そして多様性から生まれる困難さというように論としてつなげるといいかと，皆さんの意見を聞きながら思いました。

つまり，分かり合おうとする，他者に胸襟を開くといった姿勢を持つことによって，自分も肥やされたり，世の中がうまくいったりするんだという，そういう価値，伝え合

いの価値を最初に書くというのはいかがかと思いました。

○山田委員

今，議論になっている「分かり合い」ということですが，１（２）の最初の「・」のところ。「歩み寄ろうとし，お互いの情報や気持ちを共有する」について，情報は共有するんですが，気持ちは分かり合うというところにつながっていくのではないかと思います。そこを整理していった方がいいのかという感じがしました。

そこが２（１）に出てくる双方向性というところの二つの要素，意味を分かり合う，主張を分かり合うということと，気持ちもそこで分かり合わなければいけないというようなこと，それを少しここで整理をした方がいいような気がしました。言い換えてみると，情報の共有と気持ちの分かり合いというようなことです。

○武田国語調査官

非常に有り難い御議論を頂いています。

一つ，先ほど，障害のある方のコミュニケーションについてというお話がありましたが，これまでの国語施策でどういう扱いをしてきたかを簡単にお話ししたいと思います。今回頂いたＱの中に，そういったことに関係するものもありましたので。

例えば，常用漢字表の改定のときに，障害の「ガイ」を，今は「害」を使っていますが，そこに「融通無碍（げ）」で使う「碍」という字，「ゲ」とも読みますが，「碍（がい）」を入れるかどうかということが議論になりました。それから，パブリックコメントでもたくさん頂きました。そのときの国語分科会の対応は，障害者の方に関する政策は，内閣府において，当時，そういった会議があり，当時の政権が，障害者制度改革推進本部というものを，ほぼ内閣と同じメンバーで作っていましたおり，そちらで「ショウガイ」という表記については議論をしておりまして，そこでの対応によってはこちらでも考えますといったものでした。

ですから，言葉の問題と言葉以外の問題というところは非常に難しいところがありますので，そこに関しては，先ほど，田中委員がおっしゃったように，ここにそういった問題の専門家がいらっしゃらないので，慎重な扱いをしていくべきかと，これまでの国語分科会に倣うと，そういうことになるのかと思います。

○川瀬委員

今の御説明を聞いて改めて思ったんですが，障害に関するコミュニケーションに関しては，改めて触れない方がいいのかなという気がします。結果的に盛り込んでいくのは，相手のために話す，相手のために伝えることの大切さを言っていくことでしょうから，障害のある方とのコミュニケーションを，例えば章立てするなり，コラムを作るなりするのは，違うのではないかと思います。人同士の伝え合い，分かり合いなので，障害があろうが，なかろうが，伝え合い，分かり合いのためにはどれだけお互いに心を砕き，配慮できるかという話を記せばよいことで，ここでは，それこそ軽々には扱わない方がいいかと思います。

○沖森主査

２（１）については少し御議論いただきましたが，（２）についてはよろしいでしょうか。何か御意見がございましたらお願いします。

○田中委員

では，質問をいいですか。２ページの２（１），（２）のところですが，（１）につ

いては，分かりやすくという文脈で，主査打合せ会において，４コマ漫画のようなものの提案がありましたが，（２）の位置付けが，Ｑ＆Ａへのブリッジなのか，ただのアイキャッチとしてあるのか，その辺が分からないのです。

それによって，（２）で何をやるべきか，放置されている（２）をどうすべきかというところも決まってくるのかと思います。事務局は，（２）はどんな位置付けというお考えでしょうか。

○武田国語調査官

これも今後また御検討いただくところかもしれませんが，言語による伝え合いがどのように行われているかというのは，言い換えると，この報告の中で，伝え合いであるとか，言語コミュニケーションをどう定義しているのかという部分にもなるかと思います。ただ，これまでコミュニケーションを定義することは避けようというような議論もありましたが，ただ，ここで伝え合いについて扱う以上は，伝え合いというものがどう行われていて，どういうものなのかというのを，２（１），（２）で示すということなのかと捉えております。

特に（２）の方は，（１）で検討をする理由の中で言語環境の変化と言っているわけですが，特に言語環境の変化の最も大きいところで，媒体の問題があります。それを，先ほど，Ｑ＆Ａの方につなげる部分なのかということもありましたが，現代の伝え合いがどういった媒体を介して行われているのか，それからどういった方法で行われているのか，それが過去とどのように変わったのかということをここで簡単にまとめておくといったニュアンスで章立てに入れております。

○田中委員

だとすると，この２ページの２は，ここになくてもいいのではないしょうか。例えば，Ⅱも，フレームな話です。Ⅲは，すごく具体的にＱ＆Ａになるので，例えばⅡのフレームが終わった後のイメージ画像的なものとして，何かすごくビジュアル的な，分かりやすいものとして見せるということでもいいのではないかと思います。

主査打合せ会で，４コマ漫画と言っていたときには，ウェブでのイメージだと思います。ウェブで見てもらうにはといった感じだったのですが，ここにこれが入ると，流れとかが違うのかなと思います。前回の主査打合せ会のときには，全体的にウェブのイメージに支配されていて，これは私だけかもしれませんが，ここにあるという位置については余り考えなかった気がします。

○川瀬委員

改めてそうやって見てみると，２（１）と（２）は，扱っていることのレベルの大きさがばらばらな感じがします。２（２）はコミュニケーションとは何ぞやに近いものであって，２（１）はケース・スタディーなのかと。

では，２（２）が上でいいのか，でも，余り概論ばかり続くのもどうかという気もします。伝え合う方法と媒体のところに，言語によらないものも一つ入れておかないといけないのかという気もします。もちろん国語課題ですので，言語によるのは基本ですが，例えば，スタンプ同士で会話する，コミュニケーションするのは，今や当たり前です。そうすると，単純に言語によるというのを表に打ち出すと，結局，「分かってないな」になるんじゃないのかと。若い世代と言ってくくってしまうのは嫌ですが，ノンバーバルの世代からすれば，「それもあるんだよね，分かってはいるんだよね」というものが一つ入ってもいいのかと。打ち言葉の一つだと思うんです，顔文字なども含めて。

○沖森主査

では，３ページ，４ページも残っておりますので，続きまして，同じ配布資料２ですが，３，４ページについて，事務局から御説明をお願いします。

○武田国語調査官

それでは，３ページ，４ページについて御説明します。

３ページですが，最初にも申し上げましたが，的確な言語コミュニケーションと言いますか，より望ましいコミュニケーションということで，当初は，「正確さ」，「分かりやすさ」，「相手への配慮」というものが，それぞれ単純に支え合っているというのではなく，場合によっては対立する部分，どちらかが優先されて，どちらかが引っ込むということもあるわけですが，そういうバランスの中で伝え合いが行われるのが理想的だという議論から始まりました。その三つの観点を，かつて国語審議会が示した「現代社会における敬意表現」という答申との関係などを踏まえて，三つではなく，四つで考えられるのではないかという議論がありました。その三つ目，今まで「配慮して」や，「他者への気配り」など，そういった言い方をされてきたものを，どう二つに分けるかということがたびたび議論になってきました。今回，ラベルの貼り方として，最後の「配慮して」の部分を「受け入れやすく」ということと，「丁度良い距離をとって」としました。「丁度良い距離をとって」は，ほかの言い方もあるかもしれません。例えば「程良い」などあるとは思いますが，取りあえず今回はこういった言い方で示しています。

４番目の「丁度良い距離をとって」というのは，敬語であるとか，敬意表現の部分ということになります。ただ，敬意表現と言うと，非常に幅が広くなってしまって，「受け入れやすく」にあるような相手に違和感や不快感を抱かせないような言葉を選ぶといったことも敬意表現に入ってくる部分ではあります。文法的にと言うか，その言葉の意味そのものに関わるところとは別に，ある形式を使って相手に敬意を伝えたり，親しみを伝えたりする，そういう部分をこの「丁度良い距離をとって」というところで独立させています。

「受け入れやすさ」というのは，これは完全に４番目と切り離せないところがあるにしても，例えば，「台風の当たり年」という言い方を使ったときに，台風というのは当たってほしくないものですから，本来はそういった言い方は恐らく避けた方が相手に対する配慮になってくるわけです。そういった言葉の選び方ですとか，使い方，そういうところに焦点を当てたのが「受け入れやすさ」ということです。前回ここは「ふさわしい」という言い方を使っていましたが，「ふさわしい」と言うと，四つ目のところの観点ともかなり重なりがあるのではないかということで，「受け入れやすい」というものを主査打合せ会の委員から御提案いただいて，ここに挙げました。

その中で見ていただきたいのは，特に「正確さ」，「分かりやすさ」は，それほどこれまで問題になってこなかったのですが，三つ目の「配慮して」の中で，二つに分ける，スパッと切れた分け方がどうしても難しい。例えば，ほかのラベルの貼り方とか，あるいは観点もあると思います。前回は，場面と相手への配慮ということで，「場面への配慮」，「相手への配慮」という分け方の御提案もありました。

それから，今は「丁度良い距離をとって」の下のところに，「自分らしさが表れているか」という書き方が入っていますが，これは「敬語の指針」にも，それから，「現代社会における敬意表現」にもありますが，敬語あるいは敬意表現というのは自己表現であるという言葉が出てきます。その自己表現というのを，言葉を変えて「自分らしさを表す」あるいは「相手の自分らしさを受け取る」としました。これも相互作用になると思いますが，例えば，この「丁度良い距離をとる」は，敬語，敬意表現の問題だとすれば，そこに「自分らしさを表す」といった言葉に置き換える方法もあるのかもしれま

せん。

この四つの分類，観点の分け方でいいのか，四つに分ける場合には，どんなラベルを貼るのがいいのか，もしかしたら，「配慮して」という三つに戻した方がいいのかといったことを是非御議論いただきたいと思います。ただ，事務局として申し上げておきたいのは，「現代社会における敬意表現」が三つに分かれていまして，「敬語の指針」がその後出て，その二つの答申を踏まえて，今，話をしておりますので，できれば同じ三つよりは四つで考えた方が新しいものになるかということは考えています。

その後，言葉がうまく見つからないので「留意事項」と入れていますが，これは「正確に」，「分かりやすく」，「受け入れやすく」，「距離をとって」というラベル，観点，あるいは要素と言ったものについて，どういったことに気を付ければいいのかということを並べたものです。これはそれほどまだ十分に，例えば主査打合せ会で詰めたものではありませんので，今後直していくべきところかと思います。この留意する内容などについても，是非御意見を頂ければと思います。

４ページは，今まで「四つの観点」と言うより，「四つの工夫」という言い方をしていました。つまり，３ページにあるこの表の四つの観点を，そのまま「工夫」と言っていました。なぜ「工夫」という言葉を使っていたかと言いますと，それは，「現代社会における敬意表現」が「工夫」という言い方をしていたからです。それに倣ったものです。ただ，実際に「工夫」と言うと，より具体的なイメージを皆さんお持ちになると思いますので，観点を生かすためにどういうことを工夫するのか，どういうことに気を付けるのかというのが，この４ページのところになるかと思います。これもまだざっと考えられることを三つから四つで挙げております。具体的に今この場でお話し合いいただくことが必要かどうかということはありますが，こういう工夫もあるのではないかといったことがあれば，御意見を頂ければと思います。

○沖森主査

では，御意見は後で頂くことにしまして，直接の御質問があれば，お受けしたいと思います。

○山元委員

ちょっと聞き漏らしたのか，理解できなかったので，お尋ねします。「現代社会における敬意表現」が三つに分かれているから，今回は四つにするとおっしゃったんですか。どういう意味か教えてください。

○武田国語調査官

「現代社会における敬意表現」を実際に御覧いただきながら話をした方がいいかと思います。机上資料「国語関係答申・建議集」352 ページを御覧ください。352 ページの「１　円滑なコミュニケーションと敬意表現」では，情報や自分自身の考え，気持ちをお互いに伝え合うことがコミュニケーションである。それは相手との摩擦を起こさずに円滑に行う必要がある。そこで三つの工夫が出てきます。

一つが，伝え合いの内容を正確に，また過不足なく伝えるための工夫，二つ目が，伝えたいことを平明で的確に表現するための工夫，三つ目が，以上のような工夫とともに，人間関係を円滑に保ちながら意思疎通を図る上で大切な言葉の工夫。すなわち，自分自身の考えを言葉で確実に伝えつつ，相手や場面への配慮を示す敬意表現を使うことによって円滑なコミュニケーションが可能となると，この答申では挙げられています。

ですから，「配慮して」という言葉で一まとめにできるかと言ってきたんですが，それはここで言う「敬意表現」という言葉に置き換えることができるのかもしれません。

ただ，特に「正確さ」，「分かりやすさ」というのは，伝え合う情報に関する部分である。この「敬意表現」というのは，相手に対する配慮の部分である。情報の部分が二つに分かれているということがあるから，その相手の配慮の方も二つに分けられるのではないかという御議論があったということです。それをずっと重ねてきて，今，一つの案として二つに分けるというのが出てきていて，先ほど，敬意表現が三つだったから，今度は四つにというのは，新しいラベルが貼れるのであれば，より分かりやすくして出した方が親切なのではないかという，そういう意味合いです。

○沖森主査

ほかに御質問はございますでしょうか。なければ，協議に移ります。

３ページ「Ⅱ　これからの社会に求められる伝え合いの在り方」，その１と，併せて４ページの「２　四つの観点を生かすために」について，自由に御意見を頂きたいと思います。特に，観点を三つにするのか，四つにするのかというようなことも含めて，御意見を頂ければと思います。

○入部委員

「工夫」という言葉を「観点」にしたということなんですが，結構このタイトル，まだペンディングになっているタイトルとすごく関係していると思います。

「コミュニケーション能力」とか，「コミュニケーション力」であると，「要素」なのかと思いますが，「言語コミュニケーション」というところで切るのであれば，「観点」ではないでしょうか。何が不足していて，何を伸ばせばいいかなど，四つ全部そろっているということがマストではないといった，そういうイメージを抱かせるものがあるのかと思います。

だから，この「言語コミュニケーション」ということであれば，「観点」となじみがいいですが，「コミュニケーション（能）力」ということであれば，「要素」とした方が良いと思います。例えば経済産業省の社会人基礎力も能力と要素という表の立て方をしていますので，まずそのタイトルとも関係していることなので，大きい問題と認識しています。

○関根委員

四つ目の「丁度良い距離」の「丁度」ですが，「丁度」と言うと，正にぴったりということなので，ここで言っている敬意と親しみのバランスとか，そういうものは，ぴったりというよりは，ある程度幅があると思うので，「程良い」とか，「適切な」とかいった言い方の方が良いかと感じました。

○山元委員

今の「観点」か「工夫」か「要素」かということに関してですが，「工夫」というのは，使うレベルが日常に近く，より具体的なイメージを私は持っていました。したがって，「言語コミュニケーション能力」とか，「コミュニケーション力」というレベルで名前を付けるとしたら，「要素」ないしは「観点」の方が良いかと思います。

１の「言語コミュニケーションにおける」についてですが，私もよく「おける」と安易に使ってしまいますが，そうではなく，「的確な言語コミュニケーションのための四つの観点（ないしは要素）」とした方が，より適切かと思います。

先ほどの武田国語調査官の御説明によって分かったことは，「正確に」，「分かりやすく」は情報に関する観点で，対人的な方が「受け入れやすく」と「程良い距離」という，そういう分け方だということです。情報と対人ということは，この四つの観点のもう一つ上位にそれを入れると，より分かりやすいと思いました。

ただ，「受け入れやすく」は，自分が相手を受け入れやすいという意味と，もう一つ，相手に受け入れられやすいようにという，その両方を兼ねているのか，よく分からないかと思います。

○武田国語調査官

これは，関根委員に御提案を頂いたんですが，元々頂いたときには，「受け入れてもらいやすく」という表現でした。それをちょっと単純に語呂の問題で「受け入れやすく」にしてしまいました。もっと何かちゃんと意味を考えるということであれば，別の言い方，あるいは「受け入れてもらいやすく」とした方がいいのかもしれません。

○石黒委員

先ほど，関根委員から指摘があったことですが，私も「丁度」というのに違和感があります。「程良い」とか「適度な」というのが良いと思います。それを前提にして気になったのは，最初に戻ってしまって恐縮ですが，１ページのところで，この四角の囲みの中に，「正確さ」，「分かりやすさ」，「受け入れやすさ」，「丁度良い距離」，全部「さ」で終わっているのに，一つだけ「丁度良い距離」になっているところです。言葉としては落ち着かないかもしれませんが，「距離の程良さ」とか，「距離の心地良さ」として，例えば，「程良さ」という関根委員の御意見を反映させるならば，「丁度良い距離をとって」という部分が，「距離を丁度良く」などになるでしょうか。そんなことを感じました。

○森山副主査

先ほどの議論のときにあった，分かる方の議論です。言語コミュニケーションと言うと，いかに言語コミュニケーションの中心になる言葉を生み出していくのかということに，どうしても議論の重点が置かれると思います。しっかり分かろうとすることも言語コミュニケーションの観点としては非常に大事かという気がします。

そういう点では，ここの表は，伝える，伝えようとする発信者側ですので，この下に，受信者側として，例えば，正確に理解しようとしているかとか，考えながら理解しようとしているかとか，相手の気持ちを考えながら受け入れようとしているかとか。どんな程度言っていいのか分からないんですが，そういったものを入れ込んだ方がいいと思いまして，迷いながら発言しました。

○山元委員

今の御意見を入れるとしたら，情緒的で申し訳ないのですが，「つながろうとする」という言葉はいかがでしょうか。対人の部分で，相手を分かろうとし，自分の思いも伝えようという，その気持ちを持つといった意味で「つながろうとする」という言葉が浮かびました。

○川瀬委員

三つの方が分かりやすいかと。三つの中が二つに分かれていて，結果的に四つに見えても，それはいいのかなという気がします。正確に分かりやすくというテクニカルな部分があるとしたら，もう一つは，残り二つになるのか，一つになるのか。抱合するのは，相手のために伝えることなのかという気がします。

だから，それが「配慮して」という言葉になっていますが，相手のためにという言い方であれば，発信者側にも受信者側にも使えるのかと思います。山元委員がおっしゃった「つながろうとする」というのを，もうちょっと対等なものとする。伝え合うというニュアンスでは，私は，相手のために話せていますかという言い方で使うことがあ

ります。正確に分かりやすくは，自分が自分のために努力するテクニカルな工夫であって，相手のためにというのは，おもんばかった上での配慮になります。

したがって，三つでも四つでも成立するんじゃないかなと。あえてその「配慮」，「思いやり」，「ふさわしさ」と「程良い距離感で」と分けなくてもいいのかなと。結果的に，今の時代は，相手のための表現というのが一番重くなってしまうのかもしれません。

○関根委員

正確に分かりやすくの方も，相手のためにというのが来るんじゃないですか。コミュニケーションですから。正確に伝える，相手のために正確に伝えなければいけない，分かりやすく伝える，相手のために分かりやすく伝えなければいけない。

それから，受信者側を入れるというのは，とても良いと思うんですが，そこで正確に伝える，受け取る側がどういうことを留意するかというと，例えば，自分でちゃんと勉強するということも出てくると思います。例えば，正確に伝えるためには，ある程度，専門用語を使わなければいけない。専門用語を使われたら，受信者側としては，分からないよと言わないで勉強しなければいけない。対して分かりやすくという場合に関してだと，分かりにくかったら，もっと分かりやすく言ってくれよという，そう訴えるのも受信者側の一つの受け方だと思います。だから，その辺りも盛り込んでいくと，より深くなっていくかなという気がしました。

○滝浦委員

先ほど，山元委員がおっしゃったと思いますが，最初の二つの「正確に」，「分かりやすく」というのが情報に関する観点で，後ろの二つがいわば対人的な観点になるかといった御発言だったと思います。三つか四つかについて，この後ろ二つにまたがって「配慮して」が入っていて，どちらがいいかと考えています。結局，対人的という部分が，言ってみれば，対人配慮ということになりますので，前二つが情報に関する観点，後ろが対人配慮に関する観点となると思います。

対人配慮と言っても，二つに分けた方がいいと思っているのは，アンケートを取っても，敬語が大事とみんなが言ってしまうとあるように，「配慮＝敬語」というのが強過ぎる気がするからなんです。それも大事だけれども，それだけではないし，その大事な方も「敬意」と「親しみ」と両方入れてくださっているので，そういう意味で，「場面」と「相手」というラベルを貼るのは，「場面」の方が苦しいかと思います。対人配慮を二つの側面で捉えるのは，今の時代のコミュニケーション状況を考えて，ふさわしいのではないかと個人的には思っておりました。

○川瀬委員

以前，関根委員が，発信者，受信者という観点，－今お話しなさっていたところですが－，この四つの観点を，例えば，上を発信者四つ，下を受信者四つにして，それが双方向矢印で行き来し合うといったものはできないでしょうか。単純に発信するときの論理になっているので，先ほどから山元委員がおっしゃっているように，「分かろうとする」とか，「興味を持って聞く」とか，「頭から否定しない」とか，何かあってもいいのかと。

○武田国語調査官

そこは是非考えていただきたいところです。双方向性ということを詰めていくと，常に，例えば二者でコミュニケーションしているときに，送る側と受ける側は常に入れ替わるというか，それもずっと突き詰めていくと，両方とも送る側，受ける側なの

で，そういう分け方はできない，となると思います。
一方で，常に送る局面と受ける局面があって，そこに注目してきれいに分けた方が話として分かりやすくなるかもしれません。一方で，双方向性ということに重きを置くなら，十分にこれが伝わっていない，先ほどの「伝え合い」という言葉もそうでしたが，まだ足らないということがよく分かりました。
例えば，互いに分かる言葉を使っているかというのは，相手に分かるではなくて，互いに分かるということで，双方向性を多少意識して書いています。ただ，もっとそれを分かりやすく双方向性，両方に関わることとして書くという書き方が一つあると思います。もう一つは，送と受に分けて示すという書き方もあると思いますが，それをどちらがいいのか，あるいは両方作ってみて御覧いただいて，検討いただくという考え方もあると思います。その辺も御意見があれば，頂きたいと思います。

○やすみ委員
今まで，何となく１対１のコミュニケーション，話合いのことをイメージしてばかりでしたが，よく考えたら，こうやって人前でしゃべる，何かをお伝えするというときに，たくさんの人の前で話さなければいけないときもあって，これもコミュニケーションを取ることのとても難しい場面です。１対１の方が，まだいろいろ察しながら何となく時間を共有できたりしますが，５人ぐらいのおしゃべりとか，すごく難しいなと感じる場面が私もあります。何気ない日常の会話でも，何となく数人でおしゃべりしているときが結構難しいと思うことがあるので，余り１対１という雰囲気だけにならないように，何かもう少し多くの人数でコミュニケーションを取るような感じのものもイメージできるような部分を作っていった方がいいのかと，感じました。

○鈴木委員
「正確に」だけが内容のことであって，「分かりやすく」と「受け入れやすく」と「程良い距離」というのが，配慮ということではないのかと思うんです。正にコミュニケーションしようとしたときの方法論的な，どうもそういうような感じがするんです。そう考えたときに，「正確に」というのは，何が正確なのかと言ったら，双方が，伝える方と分かる方が共通の理解ができたことが正確なのであって，共通の理解ができないことは正確とは言わないと思います。
したがって，やっぱり四つの分け方というのは，これはこのまま四つにしておいた方がいいんじゃないか。つまり，二つと二つとは考えにくく，一つと三つじゃないかという気がしているからす。そうすると，別に三つでいいんじゃないかという，三つというのは，一つと三つのままでいいんじゃないかと思うんです。
出版を仕事にしている者としては，いわゆる書き言葉という観点で見た場合には，今の理解が多分されると思います。内容についての話は「正確に」であって，「分かりやすく」と「受け入れやすく」と「程良い距離」というのは，これは方法論です。つまり，言葉遣いの問題という気がします。
したがって，今，武田国語調査官がおっしゃった話については，発信者と受信者と二つに分けて整理をするのではなく，一つ一つに対して双方向の説明をしていった方が多分いいんじゃないかという気がします。やはり一つと三つのような気がします。

○山元委員
今の問題をすごくシャープにやろうと思ったら，結局，相手意識，相手への配慮というのがベースにあって，構造的にすると難しくなってきてしまうと思います。ベースにあるのが相手への配慮，配慮があるから，あの人ならこのように分かりやすく話さなければいけない，という意識が働いて，「分かりやすく」となります。

「正確に」というのも，「的確に」なのかもしれませんが，この人はこういう言語文化にいるから，この人に伝えるためにはこういう言葉を使わなければいけないというような意味での正確でしたら，要するに，相手意識がベースにあります。「正確に」，「分かりやすく」は上のレベル，この情報をどう伝えるかということに行くと思います。でも，そんなに構造的，層的に言ったら，だんだん難しくなり，誰に向けて発信するかということを考えれば，並列にした方が分かりやすいような気もします。

○関根委員
三つか四つかに関して，今見ているような形の，つまり，三つ目を二つに分けて提示するという選択肢はないんですか。それを三つか，四つか一方だけにしないといけないのか。もう一つの選択肢として，この形というのはあるんですか。それともこれはもうどちらかにしようということでしょうか。

○川瀬委員
ただ，三つをくくっておいてというのもあるかと。

○関根委員
この形が分かりやすいと思うんです。
いろいろな意見が出て，三つの方が分かりやすいという意見もある。やはり配慮している中にこの二つがあるんだということも，それは理解する上での手掛かりになると思うし，また，「現代社会における敬意表現」からのつながりもあれば，こういう示し方もあるのかなと思っていたんですが，それはどうなんでしょうか。

○鈴木委員
私は，「配慮して」が「分かりやすく」にまで入ると思います。私はそういう感じ方をするんですけれども…。

○関根委員
そうすると，「配慮して」を残すとしたらどうなりますか。

○鈴木委員
残すとしたら三つに掛かる。

○関根委員
三つ目までやってしまうということですね。

○鈴木委員
はい。「分かりやすく」まで入れてしまう。

○関根委員
「分かりやすく」までの三つをくくる形ですね。
では，そうすると，そういうことになってしまうのであれば，この「配慮して」は取って，この上の四つだけが良いと。

○鈴木委員
はい。むしろ余り要らないのかと思います。
山田委員が先ほどおっしゃったことは私も非常に分かります。お考えは分かるので，

「正確に」ということだけを考えると，例えば言葉を選んで文章にするという場面を考えたとすると，多分，法律用語ですとか，理科系で言うと，すごく専門的な用語，定義された専門的な用語をきちんと理論的に並べて文章にするという，そういうことが「正確」だと思います。

ただ，それは先ほど私が言いましたように，「正確な」というのは一体どういう定義だというと，相手にも分かるというのが正確だということからいくと，必ずしもそれだけでいいかどうかが分からない。だけど，「正確に」ということを考えた場合には，やはりそれがベースにある。残りの三つ，「分かりやすく」，「受け入れやすく」，「程良い距離」というところが加味されて，相手に対していろいろな表現ができるということになるような，そんな整理ができるのかと思います。

ですから，正確だけがちょっと違う内容に関することという気がします。当然，相手によって言葉を選んでいかなければいけない。だけど，それは方法論という気がします。多分，法律の用語は恐らくかなり正確に作られている。だけど，実は条文を読んで，結構な人がそのままストレートに理解するのは厳しい文章があります。だけど，法律の場合はそうでなければいけないといった，何かそんな気がします。

○山元委員

今の問題は，「正確に」を「的確に」に直すと，解消できるでしょうか。例えば，定義された専門用語でかっちりと書く，学会の論文などで伝えるときにはそういう意識をします。でも，同じ内容でも，これは学術書ではないんだと，一般のハウツーではないが，そういう相手を配慮したら，同じことでも違う言葉を使ったりします。「的確に」にしておけば，「正確に」だけ別枠ではなしに，やっぱりベースにあるのは相手意識，読み手意識というところで配列できるかと思いました。

○鈴木委員

そうですね。確かに「的確に」という言葉の方が合うかもしれないという気がします。「的確に」の方がいいような気もします。

○塩田委員

ここで掲げている観点は，一つのものだけを突出させると，あるいは，両方を前面に出そうとすると，齟齬（そご）が生じる場合がある。それをうまくバランスを取ったものがここで言っている「的確」だと思います。

簡単に平たく言うと，最適解，一番ましなということだと思います。そうすると，「分かりやすく」というのは，私は「配慮して」と矛盾することはよくあると思います。例えば，「今日この後，一杯どうですか。」，「いいえ，私は行きません。」，すごく分かりやすいです。これが分かりやすさだけを突出させた表現だと思います。分かりやすいというのは，相手を配慮して分かりやすくする場合もありますが，そうでない場合もよくあります。

ここで言っている配慮というのは，分かりにくく，「いやあ，ちょっと今日はこの後…。」と，必ずしも分かりやすくはないですが，相手のことを配慮したというのをここで「配慮した」と呼んでいると私は思います。

○関根委員

ここに，今言ったような具体的な言い回しであるとか，語彙を例として挙げると，もうちょっとはっきりするんじゃないかなと思います。そういう具体的なものがなくて例示だけ読んでいると，それぞれの思いや視点が入ってきてしまうので，具体例を入

れておくと，議論が整理できるのかもしれません。
　それに関連してですが，最後の方の「自分らしさが表れているか」というのは，最初は違和感を覚えました。自分のことだけで，コミュニケーションとずれるのかと思ったんですが，例えば，その人らしさがはっきりしていれば距離感も取りやすいということなのかと理解しました。そうすると，ここでは，それぞれは正確に伝えるための語彙あるいは必要な言い換え，豊かな語彙というのは，言葉，語彙について言っていることになります。そうすると，最後は，例えば，自己表現のための語彙みたいな，そういうことも入ってくるんでしょうか。自分を的確に表すための言葉遣いができるとか，語彙を持っているとか，それも入りますかね。一般的には，ここは敬語語彙だと思います。

○沖森主査
　では，続きまして，配布資料２の５，６ページと配布資料３について，事務局から説明をお願いします。

○武田国語調査官
　ここに関しましては，本来でしたらＱ＆Ａの案を御覧いただきながらということも考えていましたが，既に申し上げたように，非常にたくさん皆さんから御提案を頂きましたので，それを少し整理する時間を頂きたいと思っています。
　時間の関係もありますので，配布資料３と併せてお話をしたいと思います。
　主査打合せ会では，Ｑ＆Ａに関しては，是非積極的にたくさん問いを作ってというお話もありますが，この配布資料３は，大体このようなものが一つ例として考えられるということで，前回もお示ししましたが，それをまた直したものです。
　どういう観点で直しているかと言いますと，例えば，今回，委員の皆様から頂いた問いは，全体的に非常に具体的なもので，実際，社会生活の中で出合うような言葉の問題ですとか，そういったものが非常に多かった。ですから，読んでいて非常に楽しかったんですが，一方，こういったＱ＆Ａを作ってお示しして，一般の方に御覧いただくときに，余りにも問いが具体的過ぎて，例えば問いのところが非常に具体的で，またＡも具体的な場合に，余りにもこじんまりした感じに見えてしまうおそれがあるかと思います。また，主査打合せ会，それからこの国語課題小委員会の委員の方からも個人的にメールを頂いて，余り問いが具体的過ぎて，しかも多岐にわたると，ハウツー本みたいなものにも見えかねないであろうと，そういうようなお話も頂きました。
　それで，配布資料３に挙げてあるものは，これは事務局で作ったもので，まだまだ不十分なものではありますが，できるだけ問題が矮（わい）小化しないというか，なるべく具体的なものを取り上げるけれども，国として出すときに余りにも細かいことをやっているという印象にならないようにしたいということを事務局では考えています。ですから，そういった観点も含めて，Ｑ＆Ａを整理しているところです。
　５ページから６ページに掛けましては，これは石黒委員が当初たくさんあった問いや観点を構造化してくださいました。それを利用しながら今回の四つの観点に事務局で，それこそ正確さを欠いているかもしれませんが，当て込んだものです。
　恐らく実際に読んでいただくときには，それまでの議論と合ったものの方が良い，先ほど，田中委員からもお話がありましたが，流れの中で読んでいただくのがいいということで，一つ前の四つの観点に合わせて分類するようになります。

○沖森主査
　直接の御質問はございますでしょうか。　（ → 挙手なし。）

なければ，配布資料２の５，６ページ及び配布資料３も併せて御意見を頂ければと思います。お願いします。

○川瀬委員

今更ですが，Ｑ＆Ａでなければ駄目なんですか。実例を挙げるということですよね。今，Ｑに例えば若者の敬語というのがあって，ショートアンサーがあって，ロングアンサーがあってというので，これは非常に分かりやすいやり方だと思いますが，Ｑ＆Ａにする限り，どうしても矮小化していくと思います。先ほど，関根委員がおっしゃっていたように，言語コミュニケーションにおける観点の枠組みがある程度できてきて，それを実態化したものをここでお示ししたいのであれば，先ほど言っていた具体例の方がむしろいいのではないかと思います。

関根委員のお話を聞いていて思ったんですが，「○○はどうしたらいいのでしょうか。」という形に，どうしてもＱ＆Ａはならざるを得ないです。正確に伝え合うための一例であったり，例えば，先ほど，塩田委員がおっしゃっていたような，分かりやすくはあるけれども配慮に欠ける表現みたいなものを挙げて，それがなぜ良くないのか，どうしたら良くなるのかというアドバイスであったりが，ショートアンサーなり，ロングアンサーなりである方が，コントロールしやすいのかと思います。単に書きぶりの問題でしょうか。

○関根委員

Ｑ＆Ａにするというのは，分かりやすく伝えるための一つのテクニックではあると思うんです。こういう問いの形で示せば，正にそれはどうしてなんだろうと読者は思って，それに対するアンサーの形になる。川瀬委員がおっしゃるような形にしても，それはそれでかまわないわけですが，あえてＱ＆Ａにするテクニックというのはあると思います。

それからもう一つ。余り具体例ばかりになるとというお話について。そうすると，具体例を挙げるよりも，Ｑ＆Ａの答えを一般的なものに誘導したいということですよね。そうすると，Ｑ＆Ａで分かりやすい形式でというのはあるかなと思います。

○山元委員

このＱ＆Ａの事例を見たら，今までの論議の流れから言うと，とても具体的で，いかにもハウツーという印象を受けました。四つの観点で考えた枠を，もう少し抽象度の高いところで，Ｑを四つの観点ごとに分けた方が，通りが良いと思いました。

私が送らせていただいた質問のレベルで言うと，人にものを頼みたいときにどうすればいいかぐらいのレベルです。具体的には，「○○さんにこういうことを頼みたいんだけれども，どう言ったらいいでしょうか」というもの。これは四つの観点のうちの相手への配慮でしょうか，不快感を抱かせることなく伝えるため，納得してもらう，依頼を受け取ってもらうためにどうすればいいかという枠に入ると思います。そのぐらいのレベルでＱ＆Ａを作れば，先ほどのハウツー的に急にここで具体的になってしまうというのが解消できるかと思います。

ただ，規範性ということを考えたら，そういうところで規範，これが理想だというアンサーが書けるかどうかは，おぼつかないところは感じます。ただ，多少Ｑ＆Ａのレベル，具体レベルの抽象度を上げて作ってみたらどうかと思います。

○滝浦委員

質問ですが，問いが，二百数十という話がありましたが，最終的に幾つぐらいのＱ＆

Ａに落とし込むのかによって，どれぐらい具体的で，どれぐらい抽象的かというのも，変わってくると思います。もし今ここで，配布資料３に若者の敬語とありますけれども，実際に使っているのは「させていただく」なわけで，これをこのレベルで扱うとすると，敬語のところに関する，つまり，（４）１に関する部分だけで，四つ，五つぐらいは多分欲しくなるであろうと思います。

それぐらいの感じで作っていっていいのか，そこまでは多くしないということなのか。そこまで多くしないのであれば，このＱも大きめにとらないと，カバーできる範囲が少ないですから，その辺がポイントかという気がします。

○武田国語調査官

問いの数に関しては，主査打合せ会で，前回のときにはかなり頑張ろうという雰囲気がありました。ですから，今，幾つにするということは，なかなか事務局として申し上げるべきでもないかと思うんですが，一つ事務局の中で話題になっているのは，これは最終的にはウェブでも公開するわけで，それで，たくさん頂いている問いについては，例えば，報告に全部それを挙げるのではなく，報告以降についてはウェブで公開してはどうかということです。「言葉のＱ＆Ａ」というコーナーが文化庁のウェブサイトにはあります。そういったところで，例えば委員の皆様の御見識を，御自分のお名前を出していただきながら，もう少し自由に書いていただくとか，そういったことも後々考えられると思っています。

ですから，そういう意味では，報告の中には，時間のこともありますので，ある程度固いところで絞った問いを置いておいて，報告が出た後も，皆様から頂いた問いなどについて，文化庁のウェブサイトの中で示していくなどというやり方もあるのかなと思っております。

○沖森主査

Ｑ＆Ａの部分は，まだまだ固まっていないところもありますので，それも含めて，本日頂いた意見を踏まえまして，今後，再構築していくということになろうかと思います。次回の国語課題小委員会は２か月後に予定されております。そのときまでにはちょっとまとまったものを御覧いただけるようにしたいと思います。本日，言い足りなかった点等ございましたら，事務局までお知らせいただければと思います。また，今後いろいろな面でそれぞれの委員に御相談することがあろうかと思いますので，何とぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが，参考資料１，２について，事務局から説明をお願いします。

○武田国語調査官

参考資料１と２は，「国語に関する世論調査」についてまとめたものです。常用漢字表が終わった後に，コミュニケーションの問題がよく審議の中で挙がっておりましたので，コミュニケーションに関わるような問いを「国語に関する世論調査」の中で何年かにわたってやってきました。これから発表する昨年度のものもコミュニケーションに関わる問いを扱っております。参考資料１は，近年のコミュニケーションに関する問いをまとめたもので，ある程度，事務局の分析が入ったものになっています。今後，Ｑ＆Ａや報告を御執筆いただく場面で，御活用いただけるといいかと思って，御用意しました。

参考資料２は，これまでの「国語に関する世論調査」，それから，文化庁国語課で直接やったのは平成７年が最初なのですが，その前に国語課で問いを作って，内閣官房の広報室でやった調査もあり，それも含め過去のものを全部含めて分類別に問いを分けたものです。経年の簡単な数値しか出ていませんが，経年でそれぞれの問いである

とか，近い話題をこれで御覧いただける，そういうものです。これも是非活用していただきたいと思っています。

○沖森主査

ただ今の説明について，何か御質問あるいはお気付きの点がございましたら，どうぞ御自由に御発言ください。御要望等ございましたら，いかがでしょうか。

（ → 挙手なし。）

それでは，本日の協議につきましては以上で終わりにしたいと思います。次回の国語課題小委員会までに，本日の議論を踏まえまして，主査打合せ会で改めて案を検討してまいりたいと思います。

では，先ほども申し上げましたが，執筆，あるいは，この素案に対する御相談等，事務局からお願いすることもあるかと思いますので，その際はよろしくお願いしたいと思います。本日の国語課題小委員会はこれで閉会いたします。本日は，御出席どうもありがとうございました。